

鈴木信太郎記念館だより

第11号

きしだくにお

岸田國士と信太郎ーパリからの手紙

当館では、現在、書斎の「信太郎の愛蔵書コーナー」にて、信太郎と交流のあった4人のフランス文学者^{たつの ゆたか}(辰野 隆、^{きしだくにお やまのうちよし お こばやしひでお}岸田國士、山内義雄、小林秀雄)を紹介しています。今回は、この中から岸田國士(1890-1954)に注目し、岸田がパリから信太郎宛に送った書簡を通して、二人の交友関係を読み解いていきます。

岸田國士は信太郎より5歳年上ですが、1917(大正6)年、東京帝大仏文学科に信太郎と同期で入学し、親しく交流しました。岸田が渡仏したのは1920(大正9)年です。同年1月にパリに到着した岸田は、日本大使館や国際連盟事務局に勤め、オーストリア・イタリア国境画定委員会の通訳としてイタリア、ドイツ、オーストリアの三国を訪問しています。岸田は1923(大正12)年に帰国するまでパリで演劇史を学びました。

岸田は、パリ滞在中、信太郎に複数の手紙を送っています。信太郎が1954(昭和29)年の『文藝 岸田國士追悼号』に寄稿した「岸田國士のフランスだより」では5通の手紙が紹介されていますが、当館には岸田がフランスから信太郎に送った手紙が6通所蔵されています。そこで、本稿では、上記「フランスだより」掲載の5通については概要を、未発表の1通^{ほんこく}(④番)については翻刻をご紹介します(いずれも、原則旧字は原文のまま)。



図1 『玫瑰珠』同人の写真(前列左から3人目が信太郎、後列右端が岸田)、当館蔵

①消印:ヴェ罗纳、1920.11.25、着色絵葉書【概要】

此の夏から旅に出てゐる。今奥國インスブルクから伊太利のヴェ罗纳に來た。早く出て來ないか。奥さん同道で來ることを勧める。面倒だらうがロザリヨ¹を送つてほしいな。辰野君はまだか。よろしく伝えてくれ。

②消印:東京、1921.5.23、絵葉書【概要】

伊奥獨をひとまわりして巴里に歸ると、色々な芝居が始まつて居た。「マニエ」のやるシラノ ド ベルジュラクは何より君に見せたかつた。それはさうと、ちつと便りをくれ。

③消印:東京、1921.8.2、封書【概要】

手紙を有がたう、待つて居た。一昨日、コメディ フランセーズの横で山田珠樹君に會い、君の消息を聞いた。シラノの感想は一寸まともにくいが、君の翻譯は可なりよく氣持ちを出して居たと思ふ。もう一度讀んで見たい。揃へて²送ってくれるわけに行くまいか。寫眞は出来るだけ集めて送る。[注:以下、パリで上演中の演劇に関する批評が続く。]

【注】1. 信太郎が岸田等の仲間達と共に制作した同人誌『玫瑰珠』のこと。／2. 当時、『シラノ』は『玫瑰珠』に分載されていた。

④消印：東京、1921.9.26、封緘はがき【翻刻】(図2) [注：原文で改行がある箇所は「／」で示す。]

今日福岡氏から来た手紙によると、シラノが白水社／から出るそうだが、そんなに急だとは思はなかつたので／まだ参考材料が充分に集つてゐない。たゞ雑誌／テアトルに出てゐる初演の年表面及コクラン／の扮した無類のシラノが手に入つたから送る。／口絵にでもなると面白いかも知れない。／それから、やはり白水社で君と須川君とが／雑誌「ふらんす」を出す云ふ事だが、これも結構／だ。是非仲間入りをさせて貰ふ。材料は充／分に集めて送る。大にオリジナルなものにしたい／な。下らない語学教師なんかに原稿を頼ま／ないでね。／クローデルの脚本を譯してみるつもりだとか。先生の／物は日本の役者には無理だと思ふね。舞台にかけ／るつもりだと、餘程考へものだぜ。今日はこれで失敬

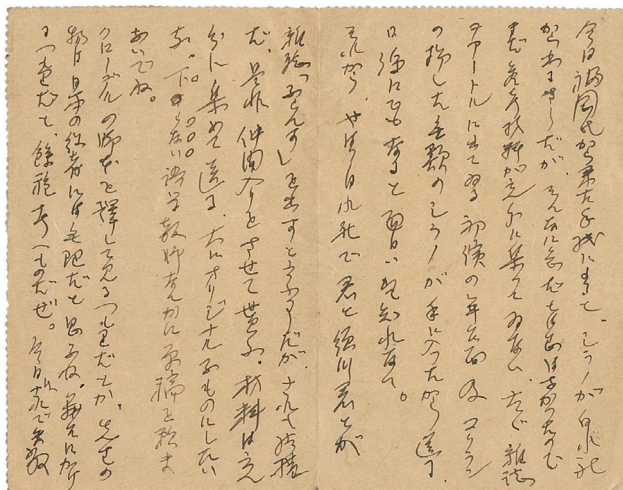


図2 岸田國士発鈴木信太郎宛封緘はがき
消印：東京、1921.9.26、当館蔵

⑤消印：1922.6.10、絵葉書【概要】

其後病氣の経過はどうだ。辰野君に會つて君がまだ寝てゐると聞いた。切に養生を祈る。

⑥消印：小石川、12.5.27(1923年)

山田君と僕は前後して歸る。僕自身、からだをこはして轉地している。君と會つたら、つまらん土産話などよりも、僕の état d'âme [注：感情、心境などの意味] をぶちまけて、君の友情を取り戻したいと思つてゐる。

①は、通訳として伊墮独の3か国を訪問した際の書簡と考えられます。②③では、信太郎と辰野が翻訳した戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』について書いており、信太郎にとってのこの作品の重要性を岸田が理解していたことが窺えます。未発表の④では、岸田が『シラノ』に関する参考資料を集めて信太郎に送るつもりであったこと、取り急ぎ入手できた資料を送る形で出版に協力していたことが分かります。雑誌『ふらんす』にも参加したい、など、パリにいながら日本での出版活動にも積極的に関わろうとしていた点も興味深く、また、くだけた口語体の文章からは二人の親密さも感じ取れます。⑤では、1922年2月に腸チフスに罹った信太郎の体調を気遣っています。⑥で「僕自身、からだをこはし」とあるのは、1923年に岸田が喀血し、ピレネー山脈と南仏のポーで療養したことを指すのでしょうか。この時すでに帰国準備を進めていた岸田にとって、健康を取り戻して帰国し、信太郎との旧交を温めることが何より楽しみだったのではないのでしょうか。

以上のように、岸田がパリから信太郎に送った手紙からは、二人の間の共通の文学・演劇への関心、雑誌や本の出版に関する協力関係、気遣いや友情などが読み取れます。当館には、上記以外にも岸田から信太郎への手紙が多数保管されています。また機会があれば他の書簡もご紹介していきたいと思います。

(奥村 景子、手紙④翻刻：川村 笑子)

【参考文献】 岸田國士「芝居と僕」、『岸田國士全集23、評論隨筆5』所収、岩波書店、1990年／大笹吉雄『最後の岸田國士論』、中公叢書、2013年／鈴木信太郎「岸田國士」、「大學同級」、「岸田國士のフランスだより」、いずれも『鈴木信太郎全集 第5巻』所収、大修館書店、1973年

手記からたどる庭の記憶

記念館の敷地の南側部分には、東西に広がる庭が設けられています。建物の正面玄関向かって東側を「書斎棟」前の庭、西側を「座敷棟」前の庭と分けられるこの庭は、季節ごとに様々な表情を見せては¹、訪れる人の目を楽しませてくれます。しかしながら、鈴木家の家族にとって庭は、単に植物や風景を愛でるだけのものではなく、この場所にもまた建物と同様に住人たちの暮らしの記憶が刻まれています。今回は、鈴木信太郎の長男で、建築学者として大学で教鞭を執っていた成文^{しげふみ}が残した手記を手がかりに、かつての庭の記憶を紐解いてみたいと思います。

図1は、成文が自身の記憶をもとに作成した1927(昭和2)年頃の敷地の配置図です²。図の右下、「書斎棟」前の庭の箇所に、「砂場」という表記があるのが確認できます(図1赤矢印部分)。この周囲はかつて、信太郎の子どもたちの遊び場として使われていました。成文は、「書斎棟」前の庭にまつわる幼少期のエピソードを以下のように綴っています。

八畳六畳前の縁側はガラス戸で開放的に庭³に面していたが、この庭は純日本風であったから、遊びに使った記憶はない。遊びはむしろRC書斎前の東の庭である。ここは洋風の(というよりは雑な)庭で、幼い頃には足踏みの自動車や三輪車を乗り回した。東の端には砂場があり、砂遊びもしたが、小学校上級になると竹の支柱を立てての走り高跳びや幅飛び、さらに後には鉄棒が設けられて逆上がりや蹴上りの練習をした⁴。

子どもたちの遊び場であったこの砂場は、1945(昭和20)年4月13日の城北大空襲をきっかけに姿を消し、現在は残っていませんが、成文の手記は、在りし日の思い出を今に伝えてくれます。

一方、西側の「座敷棟」前の庭については、1961(昭和36)年に夫婦で実家に移り住んだ成文が、毎年2月に餅つきを行っていたことが、成文の著書『文文日記』には記されています。成文が友人たちと始めたこの餅つきは、冬の恒例行事として30年以上続けられました。参加者には、成文の教え子や研究仲間たちが招かれ、その人数は毎年50人以上にもものぼったといえます。この催しでは、鈴木邸の建物の見学や住まい方が伝えられるなど、建築を専門とする人たちにとっての学びの場でもありました。『文文日記』の中には、餅つきでの楽しい様子が、成文の描いたスケッチ(図2)と共に掲載されています⁵。

今回紹介した庭にまつわる鈴木家の記憶は一端に過ぎず、他にもたくさんエピソードが残されています。住まいと同様に暮らしの現場であった庭。過ぎ去った日々思いを馳せながら眺めてみると、なんだか住人たちの声が聞こえてくるような気がしませんか。(笹川 貴吏子)

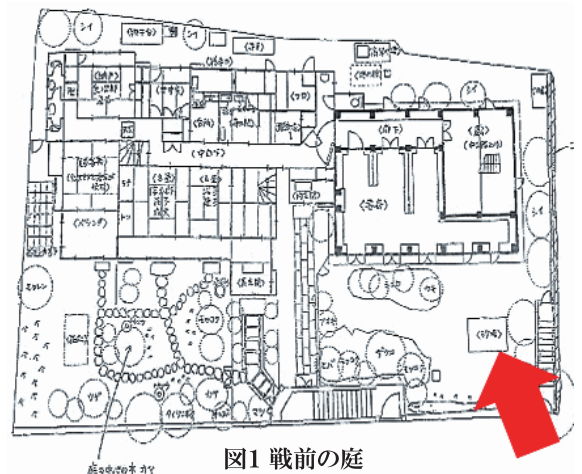


図1 戦前の庭



図2 縁先での餅つき風景

【注】 1. 記念館の庭の植栽に関する詳細は、「庭園を彩る四季折々の植栽——春の植物編」(『鈴木信太郎記念館だより』第2号、豊島区立鈴木信太郎記念館、2020年)参照。／2. 旧鈴木家住宅調査団『旧鈴木家住宅調査報告書』p.41。／3. 現「座敷棟」前の庭を指す。／4. 鈴木成文『住まいを語る——体験記述による日本住居現代史』p.131-132。／5. 鈴木成文『文文日記——日々是好日Ⅰ』p.223 二月九日の記述。

【参考文献】 旧鈴木家住宅調査団『旧鈴木家住宅調査報告書』、旧鈴木家住宅調査団、2011年／鈴木成文『住まいを語る——体験記述による日本住居現代史』、(株)建築資料研究社、2002年／同『文文日記——日々是好日Ⅰ』、文文会KOBÉ、2003年／同『文文日記——日々是好日Ⅱ』、文文会KOBÉ、2004年／同『文文日記——日々是好日Ⅴ』、文文会KOBÉ、2007年

鈴木信太郎記念館コレクション 初公開所蔵品の紹介—富岡鉄斎 陶印

仏文学者として活躍した鈴木信太郎は、趣味である篆刻にも情熱を注いでいました。彼の篆刻作品はマラルメやヴィヨンの訳詩から構想されたものや友人・知人などをイメージしたものが含まれています。また戦争中の絶望感や空虚感の中で彫った作品は彼の心理的葛藤や感情を示しており、テーマは多岐にわたります。これらの作品には、限られた空間に抒情的で自由な彼の芸術的視点が巧みに表現されています。

信太郎は友人からの篆刻依頼を引き受けることは少なかったのですが、1961(昭和36)年5月頃に彼が最も尊敬していた作家・谷崎潤一郎から篆刻を所望された際にはこれを快諾しました。何度も書簡を交わしながら「雪後馮蘭」という印文の篆刻を完成させ、1962(昭和37)年10月に贈りました。馮蘭とは欄干に凭れるという意味をあらわします。



「雪後馮蘭」(信太郎作)

二人の交流の始まりは、共通の友人である仏文学者・辰野隆と画家・高島達四郎を介してのものでした。1944(昭和19)年7月に信太郎は谷崎から『細雪』上巻(私家版)を謹呈され、その御礼を篆刻によってようやく果たせたと伝えています。

その後、1963(昭和38)年6月15日に高島が鈴木家を訪れ、谷崎からの贈り物を持参したと言って信太郎に渡したのが富岡鉄斎の陶印¹でした。その時の様子を信太郎は「包みを開くと小さな立派な桐箱の蓋の上に「蓋印」と墨書され、蓋の裏には「八十又三鐵齋造」と表と同じ筆で書かれ、中から陶印が出て来た。染付けで蓮の画が描かれ、傍款に鐵道人と力強く刻られてゐた。印面は方寸、白文で、「旂戯」と篆刻されてゐた。私が飛び上るほど喜んだのは言ふまでもない。」²と記しています。陶印は谷崎が京都に居る富岡鉄斎の遺族から譲り受けたもので、信太郎はその美しさに魅了され毎日のように机上で眺め続けたといひます。お礼の手紙を書くに至ったのは、9日後の24日になってからのことでした。

富岡鉄斎(1836-1924)は古今和漢の学識も深く、「最後の文人画家」と称され、独自の奔放な筆致で迫力ある絵画表現は国内外で高く評価されています。多くの趣味を持っていた鉄斎は、特に「余に印癖有り」と語るほど印章の収集に熱心で、300種以上の印を用いたとされています。また、篆刻家を志していた時期もあり、数多くの自作印を遺しました。



「蓋印」(箱)



「八十又三鐵齋造印」(蓋裏)



「鐵道人」(側款)



「旂戯」(白文)

この鉄斎の陶印は、豊島区立郷土資料館収蔵資料展のコーナー展示、鈴木信太郎コレクション「三人の隠士たち—碎巖・春耕・碧山—」(2024年10月1日[火]から12月15日[日]まで)に出品予定です。(徳力 まもり)

【註】 1. 陶製の印章のこと。／2. 鈴木信太郎「雪後馮蘭記」『心』21巻6月号、1968年、p.76。

【参考文献】 小高根太郎『富岡鉄斎』、吉川弘文館、1985年／野中吟雪『富岡鉄斎仙境の書』、二玄社、2002年

鈴木信太郎記念館だより 第11号

発行日 2024年9月27日

発行 豊島区

編集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<https://www.city.toshima.lg.jp/129/bunka/bunka/shiryokan/suzuki/suzuki.html>

